

## 「子育て・保育の社会化」に関する研究動向と課題

中西さやか\*

(名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科)

キーワード：子育ての社会化、保育の社会化、子どもの育ち、社会保育

### 1. はじめに

「社会で子どもを育てる」というとき、そこにはどのような意味が込められているのだろうか。これに関して、加藤（2001）は、家庭内の私的な営みとして捉えられてきた子育てが社会的な営みへと転化・発展していくことを、「保育の社会化」という視点から論じている。また、近年では、子育て支援政策において、「子育てが家族の責任だけで行われるのではなく、社会全体によって取り組む、『子育ての社会化』が重要である」（総務省 2005：185）との見方が示されている。

このように、社会で子どもを育てることについては、「保育の社会化」、「育児の社会化」、「子育ての社会化」として、これまでも様々な議論が行われてきたが、それぞれの言葉が何を意味するのかという共通理解は十分に形成されているとは言えない状況にある（吉長 2008）。しかし、近年、社会化された子育て・保育の場の拡大が目指される中で、そもそも社会で子どもを育てるとはどのようなことなのかを検討することは、重要な課題であると考えられる。

そこで、本稿では、「保育の社会化」、「育児の社会化」、「子育ての社会化」を便宜的に「子育て・保育の社会化」と総称し<sup>1</sup>、それに関連する研究動向を①子育て支援政策における「子育ての社会化」、②家庭での育児と「子育て・保育の社会化」の関係性、③子どもの育ちと「子育て・保育の社会化」という3つの視点からレビューする。そのうえで、「子育て・保育の社会化」をめぐる論点を検討し、今後の研究課題を整理したい。

### 2. 子育て支援政策における「子育ての社会化」

ここではまず、子育て支援政策における「子育ての社会化」をめぐる研究動向を整理し、そこで何が課題とされているのかについて検討する。

従来、「子育ての社会化」という言葉は、子育てを親以外の者が行う「育児機能の代替」を表わすものとして用いられ（森田 2000）、子育ての「家族化」「家庭化」の対概念として位置づけられてきた（相馬 2004）。村山（2004）は、このような位置づけに関して次のような問題を指摘している。すなわち、保育政策においては「育児の社会化を家庭育児と対立的に位置づけて、保育園必要悪論を主張し、特に乳児保育や長時間保育については『そこまでやっては母親の育児放棄を助長するだけ』として母親の育児責任を責める」手法が用いられてきたという（村山 2004：437）。

これに対して、近年の子育て支援政策においては、前述のように子育てを家庭の責任だけに帰するのではなく、社会全体で取り組む「子育ての社会化」が重要視されている。そこでは、社会と家庭が対立的に捉えられるのではなく、両者のパートナーシップのもとに子育てをしていくという視点が打ち出されている（森

---

\* 責任著者

中西さやか snakanishi@nayoro.ac.jp

田 2000)。したがって、「子育ての社会化」は、家庭での育児が困難であるときにそれを代替するのではなく、「その行為をどこまで社会で共有し、子育てを個別化、個人化、私有化させずに、集団化あるいは公然化させるか」ということを含めた概念」として整理が求められるとの見方も示されている（森田 2000：51）。

しかし、子育て支援政策において進行している「子育ての社会化」については、家庭の育児との関係性において以下のような問題が指摘されている。相馬（2004）は、「保育ママ制度」を事例として「子育ての社会化」について検討しているが、そこには女性が地域で子どもを育てるという「家族化」「ジェンダー化」の構造の再編成が見られると述べている。また、清水（2014）は、多様な子育て支援活動の展開という形で「子育ての社会化」が現実化されてきている一方で、親（特に母親）が子育ての責任を依然として家庭に付与している現状があるとし、政策レベルで「子育ての社会化」が進行しながらも、母親は子育てへの自己責任認識を強めているという矛盾を指摘している。そのうえで、子育て支援にかかわる保育者の子育て観について検討し、保育者は必ずしも「子育ての社会化」を支持しているわけではなく、親に育児責任を求める認識も持っていることが明らかにされている<sup>2</sup>。このように、子育て支援政策では、「子育ての社会化」を目指し子育て支援の場を拡大しているものの、育児や子育てが母親の責任であるという見方からは脱することができていないことが指摘されている（村山 2004）。すなわち、従来の「子育ての社会化」と「家族化」「家庭化」という二項対立を乗り越え、家庭と社会が共同して子育てを担っていくことが目指されつつも、結局は「家族化」から抜けきることができないという実態が示されている。このような問題には様々な要因が考えられるが、吉長（2008）が指摘するように、「社会化」という響きの良い言葉が使用されたことで、「子育ての社会化」が何を意味するのか十分に問われないうまに子育て支援が政策化されたことが一つの問題として横たわっているのではないだろうか。以上を鑑みると、特に、社会全体で子育てに取り組むことが、家庭での育児とどのような関係性にあるのか明確にしていくことが必要であると考えられる。

### 3. 家庭での育児と「子育て・保育の社会化」の関係性

「子育て・保育の社会化」と家庭での育児の関係性については、「育児の社会化としての保育は親の育児権を前提にすめられるものであり、育児権と保育を受ける権利とは本来対立するものではない」（村山 2004：437）ことや、「家庭での母子関係か社会的な保育かという二者択一でなく、子どもたちには、0歳から、親密で安定した母子関係と、豊かな社会的保育の両方が必要と考えるべき」（田中 1998：82）ということが述べられている。

このことから、家庭での育児と「子育て・保育の社会化」は本来的に対立するものではなく、二者択一的に捉えられるものではないことが主張されている。このような視点から、村山（2004）は、子育て支援の課題について「子育ての営みの直接的責任は両親にあるが、その親の子育て責任を単に親の自己責任だけに委ねるのではなく、すべての子どもを持つ親がその責任を果たし、どの子どもも健やかに育つように、家庭や地域での豊かな人間関係の絆に支えられるよう、社会全体でどのようなバックアップが必要なのかということにある」としている（村山 2004：437）。

以上のことから、「家庭か社会か」といった観点から子育て支援や保育を考えるのではなく、子どもが健やかに育つためには、「子育て・保育の社会化」をどのようなものとして捉えていくのかを検討することが求められる。

## 4. 子どもの育ちと「子育て・保育の社会化」

### 1) 子どもの視点から考える「子育て・保育の社会化」

それでは、そのような課題に対して、どのようにアプローチしていくことが可能だろうか。井上・笹倉（2014）

によれば、「子育ての社会化」に関する先行研究においては、歴史研究や政策批判、母親や保育者の子育て観に関する研究に比べて、子どもの視点から「子育ての社会化」を検討したものは非常に数少ないという。このことは、社会での子育てや保育を考えると、「親」や「家庭」をどのように支援するのかという視点に比べて、社会の中で子どもはどのように育つのかという視点が明確に意識されていないことを示しているのではないだろうか。

これに関して、山本（2016）は子育て支援や保育の市場化が、消費者としての親の論理を優先するものであり、結果として子どもにとって何が最善なのかという視点が置き去りにされていること指摘している。そのような育つ主体としての子どもへの視点の希薄さを問題として、子どもの視点から「子育ての社会化」を捉える必要性が提起されている。

以上のことから、子どもの育ちを中心に、社会で子どもを育てることの意義を捉え直すことが、「子育て・保育の社会化」の内実を検討するための一つの方途として示されているといえる。

## 2) 子どもの育ちと「子育て・保育の社会化」を結ぶもの

では、実際に子どもの視点から「子育て・保育の社会化」を捉え直すためには、何が必要なのだろうか。ここでは、そのための手がかりとして、加藤繁美の提起する「保育社会化論」についての問題意識を取り上げたい。加藤（2001）は、市場原理の導入という観点で進められる保育制度改革についての「保育を市場原理で埋め尽くす議論だけで十分なのか」という問題意識から（加藤 2001：319）、新時代に対応した保育社会化論をデザインすることの必要性を提起している。そのために求められることとして、20世紀後半に世界的な動向として保育の社会化が進行する中で、「子どもをどのような存在として考えるのか」「私たちは子どもに何を望んでいるのか」そして「私たちは今、どんな世界に住んでいるのか」ということを総合的に問う必要があるとするロンドン大学のピーター・モス（Moss, P.）らの論考（Dahlberg, Moss, & Pence 1999）が取り上げられている。そこから、わが国においても子ども観や教育観という根本的な部分を問い直し、社会的営みとしての保育の在り方を議論していくことの必要性が示されている。

また、子どもの視点から「子育て・保育の社会化」を捉えるために、もう一つの方向性として取り上げたいのは、社会で子どもを育てることが、子どもにとってどのような意義を持つのかを問うことである。これに関して、田中（1998）は、母子関係だけでなく、子ども同士の交流など多様な人間関係が子どもの育ちに重要な意義を持っていることが、今後の研究で明らかにされていくことに期待し、そこから社会的保育の子どもにとっての意義につながる議論を展開していくことを展望している。現在では、子どもの発達に関する関係論的な視点や社会的相互作用の重要性、子ども同士の育ちあいといった視点からの研究が数多く展開されている。しかし、これらの研究成果と「子育て・保育の社会化」あるいは社会的保育という視点は、必ずしも明確に結びついてはいないのではないだろうか。これらを架橋することで、子どもの育ちを軸とする「子育て・保育の社会化」を考えることが可能になるのではないだろうか。

## 5. おわりに—「社会保育」という視点の醸成に向けて

本稿では、「社会で子どもを育てる」ことが何を意味するのかという視点から、「子育て・保育の社会化」に関する先行研究を整理した。そこから浮かび上がってきたのは、次のようなことである。

一点目は、特に「家族化」「家庭化」という言葉との関係性の中で、「子育て・保育の社会化」が何を意味するのか明確になっていない現状があることである。そのことは、社会化された子育てや保育の場が拡大しつつも、親の育児責任が強く意識されることにつながっているものと考えられる。

二点目は、「家庭か社会か」という二項対立的な観点から脱して、「子育て・保育の社会化」を捉えていくことの必要性である。そのための一つの方途として、本稿では子どもの視点から「子育て・保育の社会化」

を捉え直すことについて検討した。

これらの検討を踏まえて、社会で子どもの育てることの意義を追究することが今後の課題であるが、これに関連して、最後に「社会保育」という言葉に触れておきたい。著者の所属する名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科では、「社会保育」という視点から、これからの保育を見通すことを目指して、様々な観点から議論を行なっている。その議論は途上であるが、そこで目指されていることの一つとして、子どもの育ちを中心に据えて保育の在り方を捉え直すことが挙げられる。新制度が開始され、子育て支援や保育の場が量的に拡大する中で、保育の質の確保が重要であることはすでに多くの議論において指摘されているところである。「社会保育」という視点は、社会の中で子どもがどのように育つのかということを中心に据えて、保育の質を再考することに寄与するのではないかと考えている。

## 注

1. これらの概念を同一視できるのかについては検討が必要であるが、本稿では「社会で子どもを育てる」ことに関連する研究を俯瞰する意図から、「子育て・保育の社会化」と総称する。なお、先行研究を取り上げる際には、そこで使われている用語に従う。
2. ここでは、子育て支援にかかわる保育者の子育て観の特徴について、「子どものためなら親は自分のことを犠牲にしてもよい」という認識の強い「子ども優先群」、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切である」という認識の強い「母親支持群」、両者の認識を併せ持つ「葛藤群」の3つに分類したうえで検討が行われている。

## 引用文献

- Dahlberg, G., Moss, P. and Pence, A. (1999) *Beyond Quality in Early Childhood Education and Care*. London: Falmer Press.
- 井上寿美・笹倉千佳弘 (2014) 「社会的養護児童と地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程—社会的養護児童の子育ての社会化に注目して—」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』17(2) : 9-15.
- 加藤繁美 (2001) 「世紀転換期の保育社会化論と子どもの権利」『山梨大学教育人間科学部紀要』3(1) : 313-320.
- 村山祐一 (2004) 「育児の社会化と子育て支援の課題について」『教育学研究』71(4) : 55-67.
- 清水美紀 (2014) 「『子育ての社会化』は進化したか—保育者の子育て観と子育てへの支援に関する認識に着目して—」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』2 : 65-75.
- 相馬直子 (2004) 「『子育ての社会化』のゆくえ—「保育ママ制度」をめぐる政策・保育者の認識に着目して—」『社会福祉学』45(2) : 35-45.
- 総務省 (2005) 『国民生活白書』
- 田中孝彦 (1998) 『保育の思想』 ひとなる書房.
- 吉長真子 (2008) 「日本における<子育ての社会化>の問題構造—教育と福祉をつらぬく視点から—」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室 研究室紀要』34 : 1-13.
- 森田明美 (2000) 「子育ての社会化～今、これから」『子ども家庭福祉情報』16 : 50-54.
- 山本由紀子 (2016) 「『子育ての社会化』と子どもの育ち」『太成学院大学紀要』18 : 83-88.

## 付記

本稿は、第1回社会保育研究会 (2015年8月30日 於: 名寄市立大学) における発表内容を加筆・修正したものである。